

皆様にはお変わりなく益々ご活躍の事と拝察致します。

今月号もお知らせ盛りだくさんで67号をお届けいたします。

（1）日本刀講演会と日本刀鑑賞会 in 村田町を開催

9月23日（土）村田町歴史みらい館にて開催されました。

午前の部は佐藤一典副会長による仙台藩工・青龍子兼次^{せいらゆうしかねつぐ}について講演会が開催され、村田町にお住まいの方、遠くは東京都からいらした来場者と共に、兼次の足跡を辿りました。

青龍子兼次^{せいらゆうしかねつぐ}とは、東方のさらに東方に住む龍の子、「奥州の龍」を意味するとされる号を用いた仙台藩刀工で、佐藤副会長が横山不動堂（登米市津山町）の宝剑を拝見する機会をきっかけに日夜研鑽を積まれ、村田の地にも所縁^{ゆかり}のある刀工であることから講題として選定されました。

後代国包を思わせるような柃目鍛えの作は素晴らしく、非常に技量の秀でた刀工のひとりです。

午後の部は高山武士先生を講師としてお迎えし、五振りの御刀を鑑賞しました。

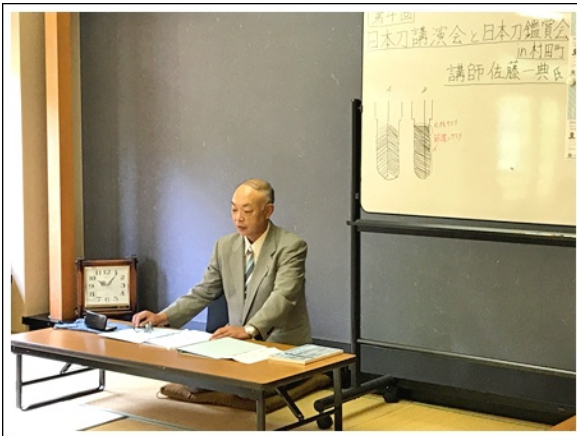
（詳細は鑑賞刀報告を参照ください）

鑑賞中はベテランの方が一般者に御刀の見方を伝授くださっている様子も見受けられ、また一般の方々より、

「ここ（宮刀保のこと）は、アットホームなかんじでいいですね」

「初参加でしたが、会員の方々がいろいろ話しかけてくださってよかったです」

という嬉しい感想を頂きました。



(2) 鑑賞刀報告

【一号刀】 太刀 ^{たかひら}高平 (古備前高平) 金象嵌銘「高平の目」

平安末期～鎌倉初期 備前国

細 身で元幅と先幅に開きがある小切先の古備前の太刀。鎌倉時代末期にも同じような細身の太刀があり間違いやすいところであるが、鎌倉時代末期の太刀との大きな違いは平安時代末期の太刀は腰で深く反って先で俯くという部分である。

茎は生ぶだが鎌倉時代中期から後期の中で実戦で使用したいという目的があったのか、茎が伏せ込んであるので時代とは合わない反り姿となっている。

刃文は小丁子乱れで沸があるのでこの場合は姿にとられることなく古備前と入札すると良い。

相州伝の作風を確立した正宗も作刀理念として古備前、古伯耆を特に強く意識していたのではないかと云われている。

相州物の大家と云われた本間薫山先生はその古備前を最も得意とされ、個名で古備前の刀工を分けられていた。本間先生が相州物を綺麗に分けられることが出来たのは、その正宗が強く意識していた古備前をより深く理解していたからではないかと考えられる。

また金象嵌銘で「高平の目」とあるが、これははっきりとした詳細はわからないが、極めてもらった所持者が「高平のように見える」という号としての意味を銘に含めてもらいたかったのではないだろうかと推測される。

(赤荻亨 記)

【二号刀】 太刀 無銘 (千手院極め) ^{せんじゆいん}鎌倉後期 大和国

茎 が最初から開けてある極めの難しいとされる^{せんじゆいん}千手院の太刀。減ってはいるが鎬は高めであり、また刃の中がほつれたり二重刃になっていたり大和気質が多いのが

特徴。

大和五派 (^{せんじゆいん}千手院、^{ほしやう}保昌、^{たいま}当麻、^{てがい}手搔、^{しかけ}尻懸) の中から極めていく場合は特徴がはっきりとしている^{そうまさき}総柱の^{ほしやう}保昌は除き、残りの四派から見ていくことになる。当麻ほど整わず手搔ほど上手ではない、また尻懸の場合は刃文に互の目が交じるために当てはまらない。

今回のようにどの流派にも属さない場合に^{せんじゆいん}千手院と極めていくことがある。

在銘の^{せんじゆいん}千手院の太刀には^{おおやまつみじんじゃ}大三島の大山祇神社に

南北朝時代の^{せんじゆいん}千手院長吉 (国宝) の大太刀が、また鎌倉時代末期には^{せんじゆいん}総柱鍛えの千手院康重 (重要美術品) の太刀が現存している。



千手院派^{せんじゅいん}は平安時代末期から南北朝時代まで続いているが、銘が揃っていないので本来の千手院^{せんじゅいん}の実態は把握しにくいところがある。総合的に見て大和気質が多く味わいのある太刀が昔から千手院^{せんじゅいん}と極められている。
(赤荻亨 記)

【三号刀】太刀 無銘（兼光極め）南北朝中期 備前国

鎗 造り、庵棟、身幅広く、重ね厚く、三尺未満。大鋒の形状はかなり減って「すすどしさ（鋭利さ）」がある。板目、杢交りで映りが立つ。帽子は尖って返る。角ばった互の目を主調とした一部乱れがあるものの、ゆったりとした刃文は匂出来で小沸づき、全体的に優しく穏やかな印象を受ける。

元来は三尺ほどの長さがあったものを大磨上によって歩兵戦に適した寸法に仕立てられてしまっているが、南北朝中期（延文・貞治）の作。

南北朝中期の姿は慶長新刀と新々刀にも多く、刀剣の勉強を始めたばかりの方には「南北朝中期と慶長新刀、新々刀の姿は似ている」と学習の紐付けとして覚えて頂いて結構だが、あくまで特徴の話であり、例外もあるということも記憶しておいて欲しい。

【個人所感】蜜が滴るような映りにうっとり魅入りました。肌も素敵。角ばった互の目が逆かった刃文に見えてしまったことから一の札では「備中、南北朝中期」、二の札で「備前」と探り当てました。

刃文の形状をしっかりと復習して記憶しておきたいです。

そして南北朝期の備前の双壁、兼光と長義^{ちようぎ}が、鑑賞刀として隣り合わせで陳列されているとは夢にも思いませんでした…。四号刀へ続く。（佐々木理恵 記）

【四号刀】太刀 無銘（長義極め）南北朝中期 備前国

鎗造り、丸棟に先三ツ棟、身幅広く、重ね厚く、三尺未満。大鋒であるが減りが少なく三号刀のような「すすどしさ」はない。板目やや肌立って沸づき、帽子は突き上げて尖っている。刃文の沸は強く、乱れ激しさを感じる。

三号刀と同様に、元来は三尺ほどの長さがあったものを大磨上げがなされているが、南北朝中期（延文・貞治）の作。鍔^{はばき}には上杉家の家紋「竹に二羽飛び雀」が施されている。

入札の際は兼光と長義^{ちようぎ}は同然と判定しているが、厳密に言えば両者の作風は全く異なっており、兼光の穏やかな刃文に比べ、長義^{ちようぎ}の刃文はとても変化に富み、刃幅に高低差があるような激しいものが多い。

【個人所感】姿形からみて、南北朝中期ではないかと思ったのですが…「まさか同じ時期に作られた御刀と一緒に陳列されるわけがないだろう」という考えのもと、一の札で「慶長新刀」と入れました。（お約束通り…）

添削の際に高山先生より「三号刀と四号刀、同じ時期の作と感じませんでしたか」と質問を受け、「はい、そう思いました！」と元気に答えてみました。

…眼を鍛え、「同じ時期の刀が陳列されることはない」なんて思い込みは捨てるよう努めます。

この長義^{ちようぎ}は過去にも鑑賞刀として出展されたことがあります。私は気づきませんでした…。ベテランの方より鍔^{はばき}も

御刀を特徴を学ぶために大切なポイントだと教えて頂きました。双壁である兼光と長義^{ちやうぎ}を拝見できて幸せ。

ちょうど数日前にまるで山鳥毛を思わせるような刃文を持つ相伝備前の御刀（無銘で、個人的には長義^{ちやうぎ}と踏んでいる）を拝見したので、今月は長義^{ちやうぎ}尽くしです。これも幸せ。（佐々木理恵 記）

【五号刀】平脇差 銘 播磨守藤原輝廣^{はりまのかみふじわらてるひろ} 新刀 安芸国

一尺 二寸程 庵棟 重厚 身幅広 反深先反付く。表二筋樋 裏棒樋に腰樋
（研ぎ減りなければ添樋か）。

板目流れて大空目も顕著でざんぐり肌と見る 地鉄明るく地沸付く。

低い直ぐ調に等間隔で尖り刃で構成。表裏揃う刃文。切先直ぐに小丸深く返る。

刃中小沸できで金筋掛かる。

古刀期の若狭守氏房、新古境の飛騨守氏房などの様に永禄、元亀、天正、文禄など姿においては室町末期と見ても何ら差し支えない。また刃文構成においても末関と同様と見ることはできる。

初代肥後守輝廣は関兼常末孫、初銘兼友。現存作はととも少なく二代は多い。

一説では二代の播磨守輝廣^{はりまのかみてるひろ}のみが埋忠明寿^{うめただみょうじゆ}に師事したとも。

また高山先生の関鍛冶通名の「兼」を冠する銘が永禄期よりどんどん減っていくとのお話。

確かに末関一流刀工においても新刀期にかけて、さらに「甚六兼若^{じんろくかねわか}」までもが「越中守藤原高平」と改名する理由が分からないと話されて何故なのかという疑問をお持ちで視点の違いが興味深かったです。

烏滸^{おこ}がましくも私見ですが古刀期関鍛冶は職人座として組合様に備前に対抗し団結をもって隆盛を為したと思います。戦国最後の時代に向け、刀匠も自己アピールの個を打ち出して行った為ではなどつらつらと。

浅い私見としてお聞き流しくださいませ。（三浦弘貴 記）

(3) 会員通信

本ニュースの編集・配信係の佐々木です(´・ω・`)ｷﾘｯ

今回はお知らせしたいことが多すぎて場所が足らず、ほぼ「佐々木の部屋」と化している本コーナーも占拠してお送り致します。

お知らせ。宮刀保公式ホームページを開設しました！

ホームページ URL は <https://www.miyagiokatana.com/> です！



8 月 19 日に、宮城県美術刀剣保存協会の公式ホームページを開設しました！

現在は本協会に所属する会員の御刀に対する想いをお話いただいたインタビュー記事の掲載している他、日刀保各支部のホームページとの相互リンクが着々と進んでおります。

地道に少しずつ、経験と情報を積み重ねて参りたいと考えておりますので、どうぞあたたかい目で見守ってくださいますようお願い致します。

(ちなみにホームページの背景用に使用している画像は、6 月に塩竈神社にて開催された鑑賞会の模様です)

お知らせ 2. 広報チームからお願いしたいことがございます！

以前から本コーナーにて、当会の活動を一般者へ広めることを目的に有志が集まっていることをお伝えしておりました。ホームページに掲載する記事や鑑定会ニュースの作成などの活動を通して有志 7 名・・・広報チームとして宮刀保をより良い会にするために必要と考えましたことを提示させていただきます。

- 初心者練習用スペース確保について

本協会々員ではない方を対象に、必要なマナー（御刀に対する姿勢、礼儀作法、取り扱い方法など）を習得させるために練習用スペースを設置し、広報チームの支援のもと木刀や模擬刀を使用した実践教育をおこないます。

- 写真撮影と録音に関するご承諾のお願い

鑑定会ニュースやホームページの記事作成の広報活動の目的で、催事の様子や刀装具等の撮影、または解説を録音することがございます。参加者または当事者より了承を得た後に実施するよう徹底したいと考えておりますので、催事が始まる前に口頭で周知させていただきます。何卒ご了承頂けますようお願い致します。

御刀や刀装具を愛する方々が年齢や性別を問わず、ご縁あって一堂に会する宮刀保。

初めての方もベテランの方も、互いが居心地よく、楽しく過ごして、心を満たして帰路につけるような会でありたいと願っております。



尚、広報チームは左の画像にあるような専用の名札を付けております。

もし名札を付けた会員を見かけた際は、ご支援およびあたたかいフォローをぜひぜひお願い致します！

以上、会員通信でしたっ (^▽^) ノ

<ご意見・投稿の連絡先>

鑑定会ニュース編集係 事務局 佐々木

●E-Mail : okatanamiyagi@gmail.com